２０２４年１１月２２日　Vol.２３２

日本の食文化を担う企業がＩＰＯ

　インバウンド需要が盛り上がり、外国人観光客の消費が日本経済や企業活動にとっては重要な要素となってきました。この傾向はよほどのことがない限りは一過性には終わらず、引き続き日本国に足を運ぶ人々に良き思い出として残りもう一度訪れてみたい、あの料理を食べてみたいという原動力となるだけでなく、まだ日本の地を踏んでいない皆さんにとっても、一度は行ってみたい先として日本の評価が高まることになります。

　日本には様々な文化、芸術、科学技術が様々に横たわっています。食文化はその一つ。外国人観光客にとって日本で食べるお寿司や天ぷら、ラーメン、うどん、更に最近ではたこ焼き、おにぎり、などのファーストフードも興味津々といったところかと思われます。コロナ禍で痛手を受けた日本の食文化を担う飲食業界は折しものインバウンド需要の高まりの中で漫画やアニメ、ゲームに続く世界的な事業展開の可能性を秘めていると言えますが、こうした潮流の中で２２日にスタンダード市場に上場するガーデン（２７４Ａ・公開価格３２００円）はラーメンやうどんなどの主力２業態を中心に積極的な店舗展開を図っており、今後の高成長が期待されます。同社のこれまでの成長は難度の高い再生型Ｍ＆Ａによってもたらされてきました。再生型Ｍ＆Ａの実績の積み重ねでノウハウも蓄積。このノウハウを武器に成長を図ると先日お目にかかった川島社長は成長への意欲を燃やしています。１１月１日現在の出店数は１９１店舗（うちＦＣは３４店舗）。そのコアである横浜家系ラーメンの壱角家は首都圏を中心に１２０店舗以上を展開。俗に言う家系ラーメンと呼ばれるラーメンは横浜駅西口にある吉村家が元祖とされ、その特徴は豚骨＋鶏油（チーユ）と醤油ダレによる濃厚スープにコシの強い太麺。首都圏を飛び越え、全国まで広がる空前の大ブームとなる中での今回のＩＰＯです。今２月期の業績は中間期段階で売上高８５億２１百万円（＋１５．１％）、営業利益１０億４１百万円（＋４２．０％）と好調に推移。営業利益率は１２．２％で、同業他社と比べても高い。通期の業績計画は売上高１６７億円（＋９．１％）、営業利益１８億４０百万円（＋２１．９％）を予想していますが、冬場のシーズンを迎えて下期の業績がよほどのことがない限りは中間期を下回ることはないと想定されるため、３Ｑ決算発表時には上方修正される可能性も考えられます。

　今後の具体的な中長期成長戦略は上場後に示されることになるかと思われますが、ＩＰＯ直後においては、なかなか投資家に認知されないため評価が定まらない可能性もあります。面談して分かったことは日本の食文化は世界にも通用するということ。この点を踏まえてグローバル展開にも意欲的で既に東南アジア（マレーシアなど）にも進出し始めています。アパレル業界のユニクロのようなグローバル展開などが期待されるとすれば同社への投資家の期待は膨らむことになりそうですが、それは今後のＩＲ活動を通じて徐々に認知されることになります。今回のＩＰＯ時の新株発行で手にする５０億円の成長資金を得て自己資本比率は２０％から５０％以上へと大きく改善。おそらく調達した資金で積極出店しながらの成長に向けたストーリーが今後示されるものと大いに期待されます。

（東京ＩＰＯコラムニスト　松尾範久）